

資料文獻 コーナー

今回は会員による投稿を紹介します。今後、この方式もときたま採用していく予定ですので、会員の皆さんからの積極的な投稿をお待ちしています。

『福島 原発難民 南相馬市・一詩人の警告 1971年～2011年』
若松丈太郎著 コールサック社 1428円

著者若松丈太郎さんが、3・11の震災まで暮らしていた福島県南相馬市の原ノ町は、上野駅から常磐線の特急で約3時間20分（私の実家の浪江町からは特急で15分）。常磐線のいわき駅から原ノ町駅までには、四倉、檜葉、富岡、大熊、双葉、浪江、小高の駅があり、檜葉と富岡の間に福島第二原発四基があり、大熊と双葉の間に福島第一原発六基がある。

若松さんは相馬地方の高校で、若者達と共に歩んできた元国語教師であり、10冊近い詩集を刊行してきた詩人である。また日本国憲法の成立に寄与した憲法学者鈴木安蔵や、埴谷雄高や島尾敏雄の業績を伝える「埴谷島尾記念文学資料館」（小高区）の調査員として、相馬周辺の文化人の業績を発掘してきた研究者でもある。福島第一原発から25kmに位置する南相馬の地であって、福島原発が発電を開始した1971年から現在まで、若松さんは原発の危険性を一貫して告発し警告する評論を書き続けてきた。それは緻密な検証と事実裏付けられた揺るぎない誠実な言葉である。

チェルノブイリ事故から8年後、1994年の5月、若松さんはウクライナを旅しチェルノブイリを訪ねる。美しいウクライナの土地で、チェルノブイリ30km圏の無人地帯を目の当たりにする。8月、東電は福島県に対し、第一原発の敷地内に原発二基の増設を申し入れた。その9月に書かれた若松さんの文章の一節。

「私たちは私たちの想像力をかりたてねばならない。最悪の事態を自分のこととして許容できるかどうか、想像力をかりたててみな

なければならない。誤解されることを恐れずに言えば、最悪の事態とは、自分を死にいたらしめつつあるものの意味を理解する時間さえ与えられず、一瞬のうちに死なねばならないということでは、おそろくないはずである。あるいは、被曝による障害に苦しみつつ、(略)残された生涯を病院で生きつづけなければならぬということでも、おそろくないような気がする。

しかし、最悪の事態とは次のようなものも言うのではなかろうか。それは、父祖たちが何代にもわたって暮らしつづけ、自分もまた生まれてこのかたなじんできた風土、習俗、共同体、家、所有するあらゆるものを、村ぐるみ、町ぐるみで置き去りにすることを強制され、そのために失職し、たとえば、十年間、あるいは二十年間、あるいは特定できないそれ以上の長期間にわたって、自分のものでありながらそこで生活することはもとより、立ち入ることさえ許されず、強制移住させられた他郷で、収入の道がないまま不如意をかこち、場合によっては一家離散のうきめを味わうはめになる。たぶん、その間に、ふとどきな者たちが警備の隙をついて空き家に侵入し家財を略奪しつくすであろう。このような事態が10万人、あるいは20万人の身にふりかかってその生活が破壊される。このことを私は最悪の事態と考えたいのである。これは、チェルノブイリ事故の現実に即して言うことであって決して感傷的な空想ではない。

今、17年前に書かれたそのことがそのまま、福島原発30km圏で起こっている。原発事故によって私達が失ったものをこれほど如実に指摘しえている文章はない。もう取り戻すことができない大切なもの。沢山の人が今読んで欲しい本である。（文責・針谷順子）